本場イタリアで認められたマッケイ製法の高級紳士靴

シューフィル　城（たち）　一生（いっせい）

1955年のアメリカ靴産業視察団が引き金となり、業界では国際舞台へのアプローチが様々な形で進められた。海外渡航が規制されていた時代にもかかわらず、企業・団体の欧米産業視察が繰り返し行われ、60年代に入ると海外見本市への団体出展、アメリカや旧ソ連への靴輸出も盛んになっていった。

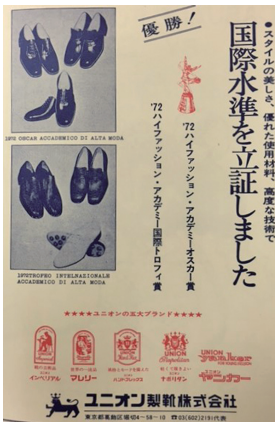
そして、消費が大きく伸び、ファッション化が進む時代を背景に、大手・有力メーカーの間では、欧米の靴企業との技術提携やブランドライセンス契約が盛んになる。60年・マレリー（ユニオン製靴）、61年・リーガル（日本製靴）、65年・ハッシュパピー（大塚製靴）、67年・ピエール・カルダン（スタンダード靴）、68年・シャルル・ジョルダン（リリー製靴）、シオックス（イイダ）―― 提携ブランドは次々とヒットし、ショップ展開、製販系列化など新たなビジネス変革をもたらした。

中でも、イタリアを代表する名門・マレリー社と提携し、マッケイ製法の高級紳士靴メーカーを目指していたユニオン製靴（現・世界長ユニオン）は技術開発・向上に熱心で、72年にイタリア・トリノで開かれた製靴技術コンクールで日本メーカー初の最優秀オスカー賞を獲得する。さらに、73、74年と3年連続して受賞、靴の先進国企業からも大いに注目された。当然のように日本でも話題を集め、「マレリー」はエリートサラリーマンが履く靴として市場拡大し、同社は全国取扱店の組織化、東洋一の靴工場建設など飛躍を遂げる。商品的にも、日本のビジネスシューズの定番ともいえるワンポイント金具付きスリッポンや高級メッシュ靴を広め、80年代には医学研究者の協力を得て「足」と「歩行」を科学する靴の開発をするなど時代に先駆けた靴づくりを続けていった――。

国際化が急速に進む21世紀も20年代に入っている現在――明治の靴業創設から約20年後、ロンドン、パリで開かれた万国博覧会に靴を出品し銀杯を受賞した大塚商店（現・大塚製靴）。そして、戦後の産業復興から約20年後に世界の靴舞台で脚光を浴びたユニオン製靴。そんな前例を凌ぐ意欲的で独創性に富む日本の靴と企業の登場が待たれている。

「マレリー」1972年オスカー賞受賞作

オスカー賞受賞時の様子



受賞を誇る当時の企業広告